「主婦ズ・ナイト」

―初稿―

2024/9/16/

米俵

〈人物表〉

小林　麻美　（４３）　子供二人
田辺　香織　（４３）　バツイチ・子無し
桐野　綾　（４０）　結婚歴なし

〈ログライン〉

麻美は、女風の話をきっかけに、自分の息子が働いているのを見つけてしまう

〈ねらい〉

・コメディを書く

1.

綾の部屋・室内（夜）

都内の分譲マンション。
小林麻美（４３）、田辺香織（４３）が酒を飲んでいる。鈴木綾（４０）は机に突っ伏して寝ている。
３人の周りには空けた酒缶やボトルが転がっている。
香織、空になったグラスを強めに机に置いて、

香織　「本当！　カラっカラなのよ」
麻美　「あー。ごめん、ごめん。気付かなかった」
と、香織のグラスにお酒を注ぐ。
香織　「ちっがーーーう」
麻美、驚く。
香織　「喉じゃない。女、女としての渇き……」
麻美、虚空を見つめて、
麻美　「あー……」
香織　「あーじゃないよ。麻美も感じてんでしょ？」
麻美　「何十年も前に諦めてる」
香織　「ちょっと！　諦めたらそこで試合終了だよ？」
と、麻美の肩をつかみ、ゆさゆさ揺らす。
麻美、なすがまま、
麻美　「うーん……」
香織、揺らす手を止め、
香織　「いい？　女の性欲なんざ更年期前がピーク。これからピークを迎えんだよ」
麻美、肩を回して、冷めたように、
麻美　「えー。そりゃ怖い」
香織　「危機感を持てー」
と、スルメを掴んで麻美の前に出す。
麻美、そのスルメを食べながら、
麻美　「はいはい」
香織　「いいのか？　このまま死んで」
麻美　「（笑って）死ぬって」
綾、突然起きて、
綾　「嫌ですね」
麻美と香織、綾の方を見る。

香織「でしょ？」
綾、真顔で、
綾「はい。普通に寂しいです」
麻美「うーん……」
香織「おい、輪を乱すな。賛同しろー」
と、麻美の頭をこねくり回す。
麻美「でも、旦那いるしなー」
香織「なんだ、マウントか？　相手いますマウントか？」
麻美「違うって……そういうの全然だし」
香織「じゃあ、同じじゃー道連れじゃー」
と、麻美を後ろから羽交い絞めにする。
香織の手をほどきながら、
麻美「だからって、相手どうすんの？」
綾「女風とかどうですか？」
麻美「え？」
香織「それだ、それー」
綾「興味あったんですよ。セフレとも別れたし」
と、ノートパソコンを引っ張り出す。
麻美、動揺した様子で、
麻美「えっセフレ？」
香織「綾、セフレいたんだ」
綾「香織さんいないんですか？」
と、パソコンを起動させる。
香織「別れた旦那とちょいちょいあったけど……あれはなんか違うな」
麻美、動揺した様子で、
麻美「えっ前の旦那？」
綾、キーボードを打って、
綾「元旦那とか新鮮味ないっすよね」
香織「それな。だから枯れる」
綾、画面を見ながら、
綾「んー、女風あり過ぎる」
香織「見たい見たい」
と、パソコンを覗き込む。

麻美、二人の間に割り込んで、
麻美「ねー。ちょっと待って」
香織と綾、麻美を見る。
麻美「ごめん。全然ついていけてない」
香織「大丈夫、大丈夫。とりあえず、女風で探そって話」
麻美「いや、〝じょふう〟ってなに？」
香織「えっ、マジで？　知らない？」
麻美、頷く。
香織「重症患者入りまーす」
綾「女性用風俗ですね」
麻美「女性用？　風俗？」
香織「そう」
麻美「ないない。そんなの利用しようとしてんの？」
香織「安全、安心、本番なし。マッチングよりいいと思うけど？」
麻美「いや、そういう事じゃなくて」
綾「でも、本番なしとか、逆にモヤっても嫌ですよねー？」
香織「そこは相手次第でしょ。テクニックがあれば問題なし」
綾「まあ、試してみて――」
麻美「違う、違う。（強めに）本番とかの問題じゃないって。二人の会話おかしいよ」
一瞬、静まりかえる。
香織「（辛そうな声で）若い頃嫌ってたおっさんみたいな会話になってんのは悲しくなるよね」
綾「辛いっすね」
香織「これがアラフォー」
綾「そして、更年期へ……」
香織と綾、大袈裟に溜息をつく。
麻美「ごめん、ごめんって。でも、男を買うとか……」
香織「うーん、買うっていうと、なんかね」
綾「お付き合い頂く？」
麻美「でも、風俗でしょ？」
香織「まあ、百聞は一見にしかず。とりあえず、見てみよ」
綾「ですね」

麻美　「いや、私はいいよ」
　そっぽを向く麻美を真ん中にして、三人でパソコンを見る。
綾　「とりあえず、有名店ですかね」
香織　「変なのはいなさそうだよね」
　ページを進めていく二人。
綾　「あっ、この子可愛い」
香織　「韓流系だ。綾、好きそ」
　麻美、チラッと見る。
香織　「私、この人かな」
綾　「なんか、前の旦那さんに似てません？」
香織　「うわー。無意識に選んじゃってんの嫌」
　麻美、チラッと見る。
綾　「新人とかどうですかね？」
香織　「えー、初めてはベテランのが良くない？」
綾　「初心な発言」
香織　「おばさんの初心は駄目ですか？」
綾　「まあ、他店からの移動も新人ですから」
香織　「それだ」
　綾、新人紹介のページを開く。
　麻美、画面を見る。
　パソコン画面。新人紹介のページがスクロールされていく。
　麻美、急にパソコンを持って立ち上がる。
香織　「（笑って）ちょっと急に。見えんし」
綾　「麻美さん。まさか、ついに？」
　麻美、クリックして一人の新人のページを開く。食い入るようにパソコン画面を見る。
　必死の形相。
　香織、麻美を見上げながら、
香織　「気に入ったん？」
綾　「いいと思いますよ。主婦でも利用してる人多いですし」
麻美　「（大声で）違う！」
　香織と綾、麻美の声に驚く。

香織　「どうした？」
麻美、力なく、パソコンを香織に渡す。
麻美、ソファーに突っ伏す。
香織、ページを確認する。綾も覗き込む。
新人の日記ページ。顔には黒目戦。
香織　「この子がどうした？」
麻美、クッションに顔をつけたまま、
麻美　「私の息子（よく聞こえない）」
綾と香織「えっ？」
麻美、顔をあげて、
麻美　「私の息子」
綾と香織「ええーっ」
静まりかえる。
外からサイレンの音が聞こえる。
再度、画面を確認する香織と綾。
麻美、クッションに顔をつけて、
麻美　「ああーっ」

（つづく）